

北前船がもたらしたもの

神村ふじを

もう3年ほど前になるだろうか、家内が吊し雛を見たいというので酒田に出掛けたことがあった。山形県は大きく内陸と庄内に分かれていて、内陸に住んでいる身にとっては、内陸地方は山、庄内地方は海であり、地理的な環境も言葉も文化もまるで違う。だから、内陸で吊し雛にお目にかかったことはないし、庄内人は活きのいい魚が食べられて幸せだなどと、知らず知らず隣の芝生的見方が身に付いてしまっている。

何でも日本三大吊し飾りと言われているものがあって、それは福岡柳川のさげもん、伊豆稲取の雛の吊し飾り、そして酒田の傘福だそうで、中でも酒田の傘福は大人気なのだそうだ。

酒田を代表する料亭山王くらぶで展示される傘福は、「湊町酒田の傘福」とわざわざ「みなとまち」を強調して行われている。

1765（明和2）年、本間家3代当主光丘みつおかが祇園祭の山鉾やまぼこに似せて京都の人形師に270両の大金を掛けて作らせたという亀傘鉾が、この傘福の元になっていると言われている。

傘福展示の会場になった山王くらぶは国の登録有形文化財。1895（明治28）年の建築というから築125年の重厚な造り。元々は宇八楼と呼ばれ、同じ日吉町にある相馬楼と並んで酒田の料亭文化を今に伝えている。

1672（寛文12）年、江戸の政商河村瑞賢によって日本海から下関、瀬戸内海を通る西廻り航路が確立され、酒田から上方（大坂、京都）、江戸への安全な航行が可能になった。

意図的に安全と書いたのは、米沢藩では江戸への廻米かいまいはそれまで陸送で峠を越えて阿武隈川へ至り、船で下して宮城県亘理町の荒浜から銚子へ、川船に積み換えて江戸へ運ぶか房総半島を遠巻きにして伊豆下田へ至り、下田から西南風を待つて江戸へ運ぶという方法が取られていたが、犬吠埼沖は大変な危険水域であったため、安全な西廻り航路の確立に期待を寄せていたという理由からである。

1692（元禄5）年、米沢藩の御用商人西村久左衛門は、1万7000両という大枚をはたいて、難所として知られる白鷹町の黒滝から始まる五百川峡谷いもがわを切り開き、左沢までの舟運あてしきを確立。左沢から大石田、酒田への航路はすでに開かれていたため、これによって米沢から江戸への廻米が安全確実に行われることになった。

酒田は、「西の堺、東の酒田」と称され、米の積み出し港として隆盛を極めた。時代は違うが、

12棟の「山居倉庫」はその庄内の米文化を今に留める蔵であると言えるだろう。

やさしくあたたか味のある傘福を堪能したあとは、老舗料亭香梅咲で昼食となった。酒田舞娘の華やかな踊り付きの食事であった。

そこで披露された酒田甚句に驚いた。筆者の地元左沢に伝わる百目木甚句とはほぼ同じに聞こえるのである。歌詞はもちろん違うが、明らかに百目木甚句は酒田甚句を元歌にしていることは素人の耳にも明らかだった。酒田甚句の歌詞はこうである。

「日和山 沖に飛鳥朝日に白帆 月も浮かるる最上川 船はどんどんえらい景気 今町舟 場町興屋の浜 每晚お客はどんどんシャンシャン酒田はよい港 繁盛じゃおまへんか」

百目木甚句は、

「左沢 お米山と積んで帆を巻きあげて 今日も下るぞ酒田舟 いつごろお帰り風次第 荷物は何々 松前の にしん こんぶに たら かすべ 京の友禪 博多帯 おみやげ話は たんとたんと」

酒田甚句の「おまへんか」も面白いし、百目木甚句の「松前」「京友禪」「博多帯」も面白い。まさに舟運がもたらした文化が散りばめられている。

紙面なので音としてお伝えできないのが残念だが、メロデーといいい歌詞の構成といい、まったくもってルーツは同じであると感じたところである。

最上川で運ばれた物は城米、蔵米をはじめ米が圧倒的に多かったが、紅花や青苧も多く運ばれた。

青苧はカラムシとも呼ばれ、野山に生えるイラクサ科の多年草だが、武士の袴や富裕層の単衣などを織る際の材料として高値で取り引きされた。奈良晒や小千谷縮はこの青苧の糸を原料に作られている。

山形県内では、置賜地方や村山地方などで主に栽培されており、大江町七軒産は最上青苧の中でも七軒苧と称され高級良質青苧の代名詞でもあった。

七軒地区の中にある大江町大字小清字十郎畑の旧家齋藤半助家は、加賀屋の屋号で江戸末期に畿内へ特産品の青苧等を販売した。最上川に3隻の船を持ち、左沢に店を2軒構えた。

明治20年代まで盛んだった青苧栽培は、北陸地方の青苧織物業の衰退によって需要がなくなり明治30年代に入って激減していった。それに代わって養蚕業が生業の主体となっていた。

大江町大字小清字田代。前述した十郎畑の隣村である。炭焼きや青苧引き（青苧から糸を引く作業）で真っ黒になった村の人々。その村人達が何よりも楽しみにしている連歌の会があった。その時の様子が結城登英雄氏の聴き取った話として「地元学からの出発」に載せてあった。

「その日は昼までに仕事を切り上げ、昼風呂をわかつてさっぱりして、男は紋付き、女は羽織に着替えて、村人全員、小さな神社に集まる。狭い境内にムシロを敷いて、車座になって句会が始ま

る。…(略)…みんな荒れた武骨な手に紙と筆をもち、座主が出す『清々と』という上の句をうけて、下の句を考える。ややしばらくして、しわくちやばあさんが、『稲の穂の出る盆の月』とかえす。…(略)…『春過ぎて』とくれば、白髪頭のじいさんが、『夏の浴衣を縫う娘』とまじめな顔で読みあげる。一座の目が、その色つばい下の句に、ほおーと声をあげて、あらためてじいさんの顔を見る。照れたじいさんが下を向いて酒をのむ。…(原文ママ)

何ともいい光景ではないか。調べてみたら、十郎畑の熊野山神社にも慶応年間に奉納された連歌額が掛けられており、左沢から西へ20kmほど離れた山村の七軒地区全体が、青苧の生産、販売の収益によって一定の安定的な暮らしがもたらされていたことが容易に分かる。最上川舟運を介してこのような上方の文化が山村にずっと息づいてきたことに驚かされる。こんな山の中の10戸足らずの集落に、このような素晴らしい文化が…。

十郎畑も田代も高度経済成長の流れには勝てず、町内にあるいは近隣の市町に挙家離村し、昭和51年頃には村は消滅してしまったが、今この時代にあつて、便利さや経済的豊かさ、あるいは教育のあり方等、マイナーなものにこそあるメリットよりもメジャーメリットばかり追い求めてきた私たちは、僻村や山間部で暮らすことの意味や真の豊かさとは何かという問いを投げ掛けられている。

*一家全体で集落を離れ、移転すること

参考文献…「大江町史近現代編」(2020年5月、大江町教育委員会)

「大江町と最上川の流通・往来の景観保存調査報告書」(2014年3月、大江町教育委員会)

結城登美雄『地元学からの出発』(2009年11月、農山漁村文化協会)

大江町誕生60周年記念誌「ふるさと発見 大江」(2020年2月、大江町教育委員会、農山漁村文化協会)